

旧暦の美学-生活とカレンダー

[金田 晋](#)

はじめに

明治 6 (1873) 年日本では、西欧のグレゴリオ暦への改暦が行われ、天保 15 (1844) 年以来使用されていた天保暦が廃止されました。それ以来、天保暦は「旧暦」とよばれるようになりました。

近年その旧暦への静かなブームがつづいているようです。たしかに農業や漁業の分野では旧暦は以前も今も有効なものとしてつかわれています。また茶道や華道といった伝統的文化の世界でも旧暦は大切にまもられてきました。だが近年では、日々の生活をより豊かに享受するために、人びとの旧暦への意識が高まっているように思います。グレゴリオ暦 (新暦) は太陽暦ですが、旧暦は太陰太陽暦で、太陽だけでなく、月の地球への影響をもあわせて考える複合暦であり、そこには自然界や人間の有事が時間軸に沿って一元的に並べられるだけでなく、人間の生活や文化が浸みこんだ、いわゆる人間化された宇宙現象が語られているように思います。とくに太陽暦では棄てられた月 (太陰) の文化がはっきり刻まれているからです。

平成 13 (2001) 年、つまり 21 世紀の最初の年ですが、東京国立天文台では「伝統的七夕」をたのしむキャンペーンをはじめました。国立の機関だから、「旧暦七夕」の名を避けて「伝統的七夕」とよんだのでしょう。新暦 7 月 7 日は梅雨のさなか、夜空に星が出る状況ではありません。旧暦七月七日は、例年ですと新暦 8 月 10 日前後、今年で言うと 8 月 13 日となり、梅雨が明けて雲ひとつない夜空の広がる確率が高くなります。その日に天の川を眺めて、できれば牽牛織女の恋の物語にも思いをはせようよ、というのがこのキャンペーンの趣旨であったと思います。伝統



的七夕の日とは「二十四節気の処暑(太陽黄経 150 度になる瞬間)を含む日かそれよりも前で、処暑に最も近い朔(新月)の瞬間を含む日から数えて 7 日目」と定義されています。平成 19 (2007) 年からは、伝統的七夕は省エネルギーと結びついてさらに大きなキャンペーンとなりました。今は広島大学特任教授をされている、東広島市福富町出身の観山正見氏(当時国立天文台長)は中国新聞 2007 年 5 月 6 日号に「暗い夜空は省エネルギー・無駄な光減らす工夫を」という文章をよせ、沖縄県石垣市と協力して毎年「伝統的七夕」の夜、星祭と称してライトダウンの運動を行っている、その夜人口 5 万人の島に 1 万人の県外者がやってくることを紹介されていました。

年末になると、デパートや銀行やいろいろな企業では新暦のカレンダーが顧客向けに配布され、壁に貼りきれないほどの数のカレンダーが家にたまって片づけに困った経験は、皆さまおもちでしょうが、その中で『太陰太陽暦・月と季節の暦』(志賀勝制作)という旧暦のカレンダーは、最初の 1996 年版が平成 7 (1995) 年に出版され、以後毎年版をあらためて刊行、有料なのに隠れたベストセラーになっています。平成 14 (2002) 年に『旧暦と暮らす-スローライフの知恵暦』(松村賢治著)が出版され、版を重ねる一方で、続編、続々編も出され、多くの読者をもっています。さらに平成 21 (2009) 年、沖方丁は貞享暦を作った渋川春海を主人公とする『天地明察』(角川書店)を出版、本屋大賞を得てベストセラーとなり、翌年には映画化もされて、話題をさらいました。読者の関心も当初は二十四節気あたりに留まっていたようですが、最近は関心がさらに細部に向かい、『日本の七十二候を楽しむ』(白井明大著、東方出版)が平成 24 (2012) 年に出版され、これもベストセラーになっています。要するに旧暦を取上げた本は、まちがいなくよく売れているようです。そうした出版物の売れ方も旧暦への関心の高まりの傍証となりましょう。

根底に月への関心もあるようです。広島県北部の三次市にはひじょうにモダンな、奥田元宋・小由女美術館が平成 18 (2006) 年にオープンしましたが、そこには月を見るためのスペースが用意されていて、売り物になっています。

彫刻家藪内佐斗司東京芸大教授は平城遷都 1300 年記念事業のマスコット「せんとくん」の作者で有名ですが、日本経済新聞 2009 年 11 月 30 日号に旧暦と日本の美意識が緊密に関係しているという文章をよせ、同紙はそれを受けてリレー方式でさまざまな分野の有識者の旧暦への関心を語らせる特集を組んでいました。

1. 旧暦への現代的関心

「旧暦」への関心は、けっして過去への郷愁、ノスタルジーではありません。否、きわめて現代的な時代の表現だと、私は考えています。明治維新の直後、日本政府はすべての政策方向を脱亜入欧に賭けていたようです。それからほぼ 1 世紀半が経ちました。今、日本はアジアにも眼を向けることが課題となっています。たとえば平成 17 年時点で世界人口は 65 億から 80 億人であるのに対して東アジアの人口は 18 億人、約 4 分の 1 を占めています。それだけでも大きな割合です。しかもこの地域のマーケットは驚異的な経済発展のお蔭で、人口比率をはるかに超える割合で世界の経済を支えるようになっていきます。韓国、中国、ベトナム、インドネシア等の経済成長を思い起こすと、このことは納得できるでしょう。

その東アジアでは生活や伝統文化のレベルで旧暦、つまり太陰太陽暦が生きています。旧暦は廃暦ではありません。東アジアの「正月」風景について、日本経済新聞 2007 年 2 月 18 日号の「春秋」子は、大要次のようなことを書きました。今日新聞の発行日である 2 月 18 日は、旧暦正月元旦(春節)にあたる。韓国や中国やベトナムは、その日正月のお祝いで賑わっている。中国ではこの日のために1億人以上の人口が民族大移動する。それにひきかえ、日本は静かな日曜日である。これからはアジアの時代。アジアの一員であることを政治、経済の側での発言が最近盛んであるが、そうであれば、お正月ぐらいいっしょに祝ってもよいではないか、と。このような記事を日経新聞がわざわざ書いた背景には、1990 年代の宮沢喜一首相以来歴代首相が東アジア共同体設立を語ってきた経緯があると思います。そして今年の正月元旦はふたたび 2 月 10 日、日曜日です。同じ光景が東アジア一帯で繰り広げられました。東アジアはモンスーン地帯、季節の変化への敏感さが人々の生活や文化を潤してきました。その感性に、この地帯に住む民のアイデンティティがあるのでしょう。この 1、2 年は国境問題で日韓間、日中間に隙間ができ、ともすれば東アジア共同体のかけ声が小さくなっている感がありますが、東アジア連帯の意義は減じていないどころか、ますます緊要度を増していると思います。その前提として伝統的な祝祭日ぐらい、東アジアの民たちといっしょに祝ってもよいのではないのでしょうか。

だがそれだけではありません。そもそも旧暦のもつ月への眼差しが、今日もっと注目を浴びてよいはずだと、私は考えています。福島での東京電力の原発事故以来、私たちは原発にたよらないエネルギー開発という新しい課題に直面しています。脱原発、それは未来に責任をもとうとする私たちの基本的考えだと思います。かわって太陽熱発電や風力発電の研究と実用化が盛んになりました。それはすばらしいことだと思います。さまざまところに太陽光エネルギーが設置されています。ビルや建物の屋根、駐車場の屋根などには太陽光パネルを設置してほしい。ただ本来もっとも効率的であるはずの光合成の場である休耕田や耕作放棄地にまで並べるのは、やり過ぎだと思います。もっと光合成の可能性を考えるべきだと思います。少なくともトマトやキュウリを、商業的運送の効率を考えて、路地植えでなくビニールハウスで栽培し、また夏の旬ではなく、一年中生産する、そのために電力が要するという考え方は、どこかで歯止めをかけないといけないと思います。

そうした太陽エネルギーの利用と並んで、私は月のエネルギー、とくに月の引力エネルギーの活用も本格的に考えてほしいと思っています。潮の干満を利用した潮汐発電です。私は職場の関係で、下関の関門海峡や音戸の瀬戸や下蒲刈島の女猫の瀬戸などをよく見ます。潮の流れ、干満の差などに驚くべきエネルギーを感じます。実際、世界では既にランス潮力発電所(仏)、クバルスン潮力発電所(ノルウエー・クバルスン海峡)が稼動していますし、カナダ、韓国、イギリス、ロシア他でも小規模ではありますが、潮力発電は研究段階を超えて実用の段階に入っているようです。不思議なのは、周囲を海で囲まれ、海峡や瀬戸などの多い日本において、潮力発電の話題が聞かれないことです。月の引力は、満月や新月のとき地球の海水を大きく引っ張りますが、そうでない日にも一日二回規則的に潮の干満を起こしています。潮力発電研究で、日本は世界をリードしてほしいと思います。

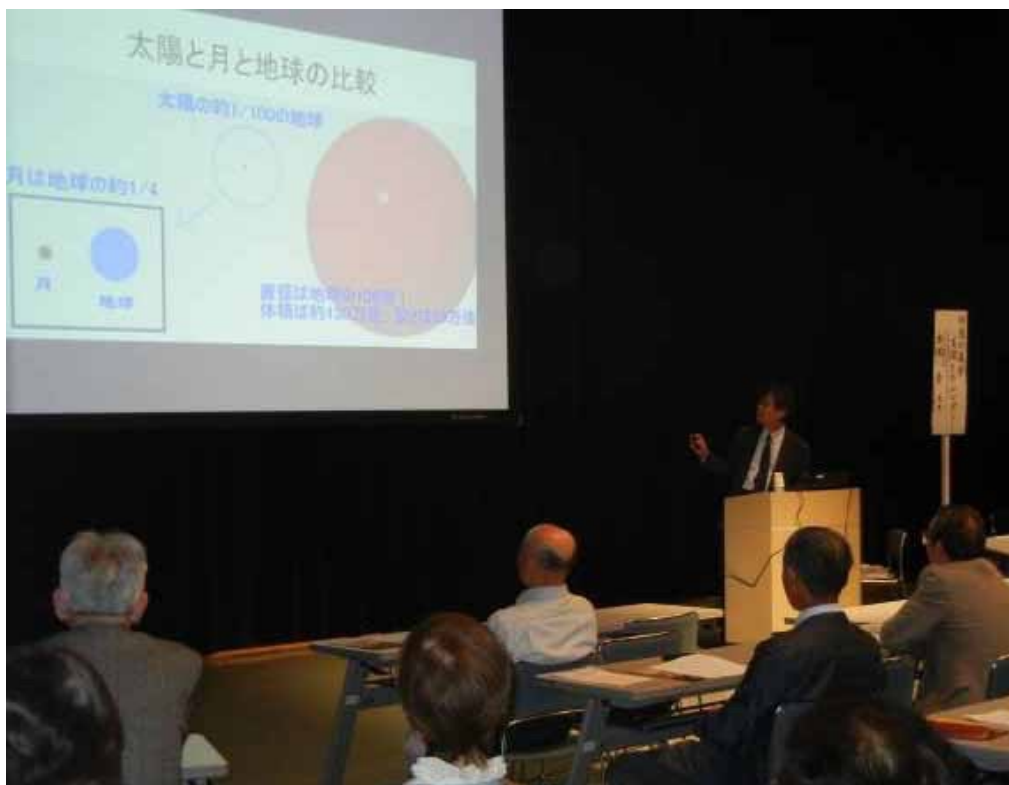
さらに私たちは現代文明により本質的な問題、夜の忘却の問題にもぶつかります。そこで大きな役割を果たしたのは電気エネルギーです。私たちは都市化の風潮の中、夜をもう一つの昼と考え、その生活を享受しています。工場は夜間労働をふつうに行っています。最近東京都知事は公共交通の終日営業の構想をテレビで熱っぽく話しているのを聞きました。夜は都市には要らないかのようなのでした。街路や有名建造物がライトアップで照らし出されています。人びとは街路樹に

かぶせた豆電球の点滅の華やかさに感激しています。その中で月や星を見ることを忘れていないでしょうか。月の地球に及ぼす働きかけを、しっかり受けとめる必要があるのではないのでしょうか。これは、現代文明のあり方を根本から問い直す哲学的問題です。

2. 太陽と月と地球の大きさの関係、そして暦の種類

さて、太陰太陽暦に話を戻しましょう。私たちが旧暦とよんでいるのは、江戸時代に作成された天保暦です。その天保暦をも含む、広義の中国暦のことを考えてみましょう。その特徴は天体暦にあります。天体とは今日の宇宙科学では壮大な宇宙をさすでありましょうが、中国暦の言う天体は、太陽と月と地球の関係だと考えてよいと思います。

太陽の直径は 139 万 2000km、地球までの距離は 1 億 4700 万 km です。太陽が発する光の秒速 30 万 km/sec ですから、地球に届くには 8 分 12 秒かかります。地球の直径は 1 万 2700km ですから、太陽の大きさは地球の 109 倍で、地球との相対質量は 33 万 3400 倍です。月の直径は地球のほぼ 1/4 で 3474km、地球との相対質量は 1/81 倍、地球までの距離は 38 万 4400km です。地球は太陽の周りを、ほぼ 365.24219879 日かけてまわります。月は地球の周りを、ほぼ 29.530589 日かけてまわります。この三つの星が互いに引き合い、反発し合いながら、運動をつづけています。太陰太陽暦はこの三つの星の関係を計算に入れたきわめて高度な暦です。



人類がこれまで考案してきた暦は大きく分類して、次の三種です。すなわち、太陽と地球の関係だけから作られたのが太陽暦、月と地球との関係だけから作られたのは太陰暦です。三者の関係を基にして作られたのは太陰太陽暦です。

太陽暦の原型になったのは古代エジプト暦です。だが後者は正確にはシリウス暦とよぶべきです。毎年夏至の頃、日の出の直前東の空にシリウス星が現れます。それを合図に、アビシニア高原を源流とするナイル川に洪水がはじまります。古代エジプトには、三つの季節、ナイル川の水かさが減る暑い季節(シュム)、増水がはじまってから終わるまでの季節(アヘト)、水が引き畑をつくる季節(ベレト)という三つの季節があるだけです。人びとはシリウス出現の日、つまりアヘトの始まりを予告する日を元日とし、それから4か月後ベレトの季節をまって、上流から流されてきた洪水後の沃土に種をまき、収穫しました。紀元前46年、エジプトを征服したジュリアス・シーザーはこのエジプト暦から想を得て、古ローマ暦を改良してユリウス暦を採用し、やがてローマ帝国の暦としました。やがてそれはキリスト教と結びつき、西欧圏の標準暦として使用されました。それが1600年以上つづきました。その間生じた誤差を修正するため、ローマ法王グレゴリウス13世は1582年、今日では世界標準暦となっているグレゴリオ暦を制定しました。通常では1年365日とし、400年に97回閏年(366日)を設ける暦です。その誤差は3221年に1日です。

太陰暦の代表は、イスラム暦(ヒジュラ暦)です。これはユリウス暦622年、ムハメッドがマッカからマディーナにヒジュラ(聖遷)した年を元年として、月の満ち欠けの周回約29.5日を基準にする暦です。1年は12か月、計354日で太陽暦より11日短くなります。イスラム暦はこの誤差を修正しませんから、33年経つとほぼ1年ちがってきます。たとえば同じ年に生まれた子どもはグレゴリオ暦で33歳、イスラム暦で34歳になるわけです。農事暦としては不向きではありますが、昼間の熱暑を避けて、夜の涼気を受けて月の明かりで行動を開始する民の生活を思い浮かべれば、きわめて合理的です。しかもその暦を1400年以上守りつづけてきた宗教的信念に、私はある種の感動をすら覚えます。

3. 太陰太陽暦、そして中国暦について

だが世界の農耕地帯の暦はだいたい太陰太陽暦です。古代バビロニア暦、古代ギリシア暦、古ローマ暦、ユダヤ暦、ヒンドゥー暦、それから日本も長く使用してきた中国暦は、いずれも太陰太陽暦です。この暦は1年を太陽暦でかぞえ、地球が太陽を周回する約365.24日を基準にしています。

一方、1月は太陰暦、月の周回29.5日を基準とします。1年は基本的に12ヶ月で構成されませんが、 $29.5 \times 12 =$ 約354日となり、365日に11日たりません。その不足分を、閏月を加えて調整する、それが太陰太陽暦の基本骨格です。

このズレをどのように修正すればよいか。答えを出した人は古代ギリシア人でアテナイの数学者メトンです。メトンは紀元前433年、月相に関して「19太陽年が235朔望月とほぼ等しい」ことを発見しました。紀元前433年とは、西洋哲学はこの哲学者からはじまると言って過言でないプラトンが生まれる紀元前427年(紀元前347年没)の数年前です。その頃にこの暦の大発見が行われたと考えてください。19太陽年は日に換算すると、 $365.242194 \text{ 日} \times 19 = 6939.601686 \text{ 日}$ 、235朔望月を日に換算すると、 $29.530589 \text{ 日} \times 235 = 6939.688415 \text{ 日}$ で、両者はほぼ等しくなります。一方、19年の月数は $19 \times 12 = 228$ ヶ月ですから、19年の間に7回の閏月を加えれば、19年 = 235朔望月が成立します。このようにしてメトンは閏月を加えることによって、太陽暦と太陰暦の間を調整しました。プラトンは、数学的計算に裏付けられた太陰太陽暦のもとで、新しい思索の方法を開拓したということになります。

このメトン周期とよばれる高度な対処法は、それぞれ独立して各地に起こったのか、それともギリシアに起こって東漸してきたのか、とにかく西暦紀元前後、中国ではメトン周期は「章」とよばれ、太初暦（前漢～後漢）や四分暦（後漢）においてその骨格が確立されていました。日本に中国の暦が伝来するのは6世紀です。元嘉暦だったと言われます。既にメトン周期で整備された太陰太陽暦でありました。

私たちはこのメトン周期という考え方が今から2500年前に確立していたこと、それがギリシアから中国にいたる各地で採用される多様多彩な太陰太陽暦にきちんと組み込まれていたことにただ驚くばかりです。私たちは太陽年の周期を基本にすえながら、月の文化を生きることができたのであります。

中国暦を含む太陰太陽暦は、太陽を基準にした暦です。中国暦では太初暦以降、1年を24等分した二十四節気の暦が生まれます。まず二至二分が基軸です。二至とは夏至と冬至です。昼の一番長い日を夏至、いちばん短い日を冬至とよびます。二分とは春分、秋分。昼と夜の等しい日です。順に5月、11月、2月、9月としました（新暦より1カ月早くなっていることに気づかれるでしょう）。二至二分の中間に四立、つまり立春、立夏、立秋、立冬が置かれます。太陽黄径270°を冬至とし、そこから時計回りに15°ずつ順に区切ってゆきます。それぞれ冬至、小寒、大寒、立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑、立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、小雪、大雪と名づけられました。

何時を年始とするか。太初暦以後、年の正月元旦は立春に近い新月の日に当てられます。そこから節と気（「中気」あるいは「中」とよばれます。）という思想が加わり、1年十二月の暦ができあがります（1月は「正月」とよばれます）。まとめると、次のようになります。正月節（立春）、正月中（雨水）、二月節（啓蟄）、二月中（春分）、三月節（清明）、三月中（穀雨）、四月節（立夏）、四月中（小満）、五月節（芒種）、五月中（夏至）、六月節（小暑）、六月中（大暑）、七月節（立秋）、七月中（処暑）、八月節（白露）、八月中（秋分）、九月節（寒露）、九月中（霜降）、十月節（立冬）、十月中（小雪）、十一月節（大雪）、十一月中（冬至）、十二月節（小寒）、十二月中（大寒）。節気については「節は月を分けるもの、気は月の名前を定める。」と言われます。

大切なのは、年のはじまりとしての正月元旦という倫理思想が生まれたということです。それは立春にいちばん近い新月の日に位置づけられます。ここを基点にして月の周回29.5日（大の月30日、小の月29日）を基準にした暦に変位してゆきます。

4. 四季について

十二月は四季に分かれます。東アジアのモンスーン地帯の気象には、四季は特別な意味をもっています。春は正月から三月まで、夏は四月から六月まで、秋は七月から九月まで、冬は十月から十二月までです。新暦に直すと、正月は2月、1カ月ずれてゆきます。ただ旧暦の二十四節気の呼び名をそのままにしているため、正月の新春の挨拶のあとに小寒や大寒がくるという、チグハグなことがおこってしまいます。

季節については、清少納言の「枕草子」冒頭の記述がすぐ思い出されます。「春はあけぼの。やうやうしるくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、やみもなほ、ほたるの飛びちがひたる。またひとつふたつなど、ほのかにうちひかりて行くもをかし。雨など降るもをかし。秋は夕暮。夕日のさして山のはいと

ちかうなりたるに、からすのねどころへ行くとて、みつよつ、ふたつみつなどとびいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさくみゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音むしのねなど、はたいふべきにあらず。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにあらず、霜のいとしろきも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火もしろき灰がちになりてわろし。」最近この「枕草子」の一節を新暦にあわせて理解しようとしたり、とくに「春」を新年度4月に合わせて読もうとする本にお目にかかるようになりました。たとえば新しい年度になって、職場に学校に気持ちを新たに出かける、そのために朝のすがすがしさを体内に吸い込もうといった決意の書と読む、といったものです。残念なことです。この一節は、あくまで旧暦の季節に即して理解すべきです。「春」は立春が似合っています。実感としてまだ冬です。まだ家中で夜具の中にどこまでもくるまっていたい時間帯に、夜明けがよい、山際にポツと明るみをさすところがよい、外に出てその景色を見ようよと、うそぶいているところがいかにも清少納言らしいと思います。四月はもう夏。暑いからか夜がいい。当時は月の出ない夜はほんとうに真っ暗だったそうです。そこにほたるが飛んでくる。その光でボーッとものが見えてくる。その明かりがうれしい。雨とは梅雨のことです。秋は夕暮れで、冬は早朝です。寒いところがいい、と言うのです。清少納言一流の強がりです。

とにかく日本の四季は、3か月ごと、四つに等分されているのがよいと思います。それが機械的に区分されているのではなく、その処し方を含めて生活の世界の表情が相応に変わってゆくの
がよいと思います。現代生活では、私たちは冬にアイスクリームを食べたりビールを飲んだり、トマトを食べたいという欲望にかられます。逆に秋の桜(十月桜)をたのしんだりします。一年中部屋の室温を同じにしたいと思います。そのような欲望にこたえようとする、ますます電力が必要になってきます。省エネルギーには、欲望への倫理観が必要だとおもいます。

二十四節気はさらに初候、次候、末候に区分され、七十二候へと細分されてゆきます。これもまた太初暦にはじまります。1節気はほぼ15日、それをさらに3区分した七十二候は、1候5日ぐらいです。七十二候全部をここでご紹介することはできませんが、日、月、星辰や植物の成長、動物の活動等を観察して生まれてくる観象授時暦であり、気候の変遷をイメージできて、読んでいたのしいものです。甲骨文や金文や詩経などにも記されていて、暦がまだ整備されていなかった殷や周の時代にはじまると言われます。

今日は4月16日、20日には穀雨に入る頃ですので、七十二候のうちその前後を抜粋して紹介します。春分、清明、穀雨はそれぞれ、初候、次候、末候に分けられます。節気の開始の日は新暦で記しておきます。二月中(春分3月20日)十候<雀始巢(すずめはじめて巣を作る)>、十一候<桜始開(桜始めて開く)>、十二候<雷乃発声(雷声を発す)>、三月節(清明4月5日)十三候<玄鳥至(つばめ来る)>、十四候<鴻雁北(がん北へ帰る)>、十五候<虹始見(虹始あらわる)>、三月中(穀雨4月20日)十六候<葭始生(あし始めて生ず)>、十七候<霜止出苗(霜止んで苗出ず)>、十八候<牡丹華(ぼたんはなさく)>、四月節(立夏5月5日)。以上の各候の名称は、中国でつかわれたものをそのまま使用したりせず、日本的に作り替えています。その名称を一つ一つ読むのがたのしい。ぜひ七十二候全部を読んでみてください。

5. 日本の暦について

6世紀中頃、中国の暦学が百済を通して、日本に輸入され、暦博士の派遣を得て、その指導を

受けながら実用化されることになりました。『日本書紀』では 553 年と記されています。それ以前にも、日本列島で自然暦が存在していたはずですが、狩猟採集の時代にも季節の意識があったにちがいません。農耕がはじまると、暦の意識はますます高められていったはずですが、たとえば稲作は、田んぼを何時耕すか、何時水をはるか、何時種をまき、苗を育てるか、何時田植えをするか、何時収穫するかを、季節や気候に合わせてその都度儀礼や祭りで集団意識を盛り上げながら、行われたはずですが、暦意識もそのような共同体の中で年中行事として繰り返され、確立していったことでしょう。そこに中国の暦が輸入されてきたということは、森や川や田畑の生産活動が国家管理の流通過程に組み込まれてゆくということにほかなりません。具体的には国家財政の基盤として、租税の対象にされるようになったということでしょう。

推古天皇 10 (602) 年、暦 (元嘉暦) をつけた政務がはじまります。大化の改新 (645 年) 以降、天智天皇、天武天皇を継承して、持統天皇は暦を基盤にする律令国家の建設に全力を傾注しました。既に元嘉暦は使用していましたが、それと併用するかたちで儀鳳暦を採用し、その子文武天皇の代 (697 年) に至って儀鳳暦に一本化することになります。天平宝宇 7 (764) 年には、吉備真備が唐からもちかえたとされる大衍暦への改暦が行われました。これらは、唐の都制度に少しでも近づきたいという願望の表れであり、藤原京から平城京、さらに平安京へと引き継がれてゆきました。大衍暦は玄宗皇帝の勅令で中国全土の天文測量を基に編集され、中国では 729 年に施行されていました。だが玄宗の失墜によって 761 年にはあえなく廃暦となります。つまり日本で使用されはじめた 764 年にはこの暦はもはや本国ではつかわれていなかったということです。それが日本では貞観 3 (861) 年まで 98 年間つかわれつづけました。

貞観 4 (862) 年、渤海使を通じて宣命暦への改暦が行われます。この暦は、中国では 822 年から 892 年まで使用されたものですが、日本では江戸時代の貞享 2 (1685) 年まで、じつに 823 年間も営々とつかわれつづけました。中国での使用期間が 70 年間であったことと比較すると、なんと長く使用されつづけたことかと、逆に驚かされます。菅原道真の建議によって遣唐使が寛平 6 (894) 年に廃止されたり、中国からの関係する情報が入ってこなくなったり、暦学の研究自体がすすんでいなかったなどと、さまざまな事情もあったのでしょう。それにしてもこの間日本でも鎌倉、室町、安土桃山、それから江戸へと政権が交代し、中国本土とも交易し、学術、芸術文化の方面での交流も盛んに行われていました。そのことを思うと奇妙な感じがします。その間ずっと同じ暦を使用しつづけることができたのは、暦と国家権力との結びつきの意識が希薄だったと思わざるをえません。

とにかく宣命暦は日食、月食の予報にすぐれたずいぶん精確な暦でした。本国で使用されなくなって、日本という周辺国で 800 年間使用されつづけて、誤差が 2 年というのは驚異であります。その暦が改暦されたのは、徳川 5 代将軍綱吉の代、沖方丁の『天地明察』(2009 年、角川書店) が主人公に選んだ渋川春海の時代でした。春海は御城碁を生業とする渋川家に生まれ、囲碁棋士であるとともに天文暦学者であり、幕府の中枢に多くの知己を得ていて、かれらの庇護のもと貞享暦 (貞享元 (1685) 年) の施行にこぎつけたのです。従来の暦が中国から輸入されたものをそのまま使用していたのに対して、中国と日本の経度の差を考慮して作り直された、はじめて日本人の手になる暦ということで画期的なものでした。

以後、宝暦 5 (1755) 年の宝暦暦、寛政 10 (1798) 年の寛政暦を経由して、天保 15 (1844) 年天保暦が制定されるに至りました。この暦は太陰太陽暦では史上もっとも精確とされています。

だが明治5 (1872) 年 11 月、明治政府によって翌年からのグレゴリオ暦への改暦が強引に行われました。既に前月の 10 月 1 日には、その前年に文部省天文局の許可を得て弘暦者 (頒暦商社) が明治 6 年用の暦 (旧暦) の販売を一斉にはじめていました。それが 11 月 9 日になって、突然、翌月の 12 月 3 日をもって明治 6 年 1 月 1 日 (グレゴリオ暦 = 新暦) に改暦するとの太政官布告が出されたのです。そのときの混乱は想像できます。当時は、今日のように現金販売でなく、掛け売り販売が一般的で、大晦日はその支払い締切日だったことを思えば、庶民はどのようにお金を工面し、どのように支払ったのでしょうか。それだけでも大変だったと思います。

しかもこの旧暦と新暦の1ヶ月のずれは、その後の日本文化の暦意識を混乱させることになりました。改暦するにしても、もっと時間をかけてさまざまな可能性、不都合性を議論して行うべきだったと思います。だが当時の政府には背に腹を変えられない事情があったようです。明治政府は廃藩置県で抱え込んだ公務員の給料の抑制に懸命のときあり、明治 5 年の 12 月分 (12 月 4 日一大晦日) と明治 6 年の1ヵ月分 (新暦なら 12 か月分ですむ)、都合2ヵ月分の給与節約によって財政逼迫を回避することをなによりも優先したのでしょうか。とにかくこの改暦は日本の「脱亜入欧」の象徴的事件でありました。

6. 生活と文化の混迷—旧暦新暦の対照表 2013 年版をもとにして—

暦によって、私たちは生活と文化に一定のリズムをつくって暮らしています。明治政府の近視眼的「脱亜入欧」によって、私たちの季節感、自然感がガタガタになってしまいました。生活や文化の面で、重大な齟齬をきたし、それが 140 年以上経った今も引きずっています。改暦以前の、日本の文芸、芝居、生活行事、歴史等がすぐには理解できなくなりました。日本人は長く中国暦をそのまま使用してきましたが、その日本ヴァージョンとして、先述のように七十二候の日本版を作成し、さらに節句などの日本独自の行事なども追加してきました。雑節についても同様です。五節句とは正月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日のことです。そのいくつかにまつわるミュートスを拾ってみましょう。

a) **正月七日** (人日の節句、七草の節句) 中国の故事に、「正月一日鶏、二日狗、三日羊、四日猪、五日牛、六日馬、七日人」があり、該当のものの殺生を控えることが習わしでした。七日目には犯罪者の刑罰も行いませんでした。「人日」という名称の由縁です。その日、人びとは春の七草を摘み、七草粥にして食べます。この行事は平安時代にはじまり、江戸時代に定着したと言われます。徹底した草食の日ということですね。昔学校で「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ」と七草の名を憶えた記憶があります。旧暦の正月七日、今年の場合、新暦に換算すれば、2 月 16 日なので、その頃ですと野に出れば、若菜が芽を出しているかもしれません。だが今の世の中では新暦の 1 月 7 日のスーパーマーケットの野菜売場に、ビニールハウスで育てられた七草がパック詰めされて、積み上げられています。あまり風情が感じられません。

正月七日についての光孝天皇の歌があります。古今集春の部に収められ、百人一首にも入っています。「君がため春の野に出でて若菜つむ/わが衣手に雪はふりつつ」(古今集春 21)。天皇は 55 歳で即位されますが、即位前に顕著な行政的業績を積み、宮中諸行事にも通じ、優れた文化人でもありました。嘉祥 3 (850) 年中務卿、仁寿 2 (851) 年三品に昇叙、50 年代から 60 年代 (貞観年代)、常陸や上野の太守、太宰帥を兼務しています。だがこの時期は、宣命暦に改暦した頃 (貞

観4 (862) 年) に当たります。行政、文化のトップには改暦事業はこのうえなく重要な関心事であったはずですが。だから「春の野に出る」のは正月七日の行事にほかなりません。「若菜」とは春の七草のこと、野に出てよく見れば、枯草の下から若い小さな新芽が顔を出している頃でしょう。でもまだ雪も舞う寒い時期、自分のためなら到底身を寒さにさらす気にもならないのですが、大事な「あなたのために」衣に雪のかかるのも厭わず、こうやって若菜つみにやってきましたよ。「君」とは恋人なのか、それとも国家なのか。この歌を、新しい暦(宣命暦)の制定期、そして二十四候への関心を下敷きにして読みたいと思いました。

「枕草子」でも七日の若菜つみを「雪まのわかなつみ」と言っています。「(正月) 七日、雪まのわかなつみ、あをやかに、例はさしもさるもの目ちかからぬ所に、もてさわぎたるこそをかしけれ。」寒さを吹き飛ばして、若菜探しにはしゃいで見せるのは清少納言の意気なりなのでしょう。

b) **五月五日** (端午の節句) は本来梅雨期です。今年、新暦で言えば 6 月 13 日、前々日の 11 日が雑節の入梅です。新暦の 5 月 5 日と混同してはなりません。今日では、新暦の 4 月末頃から鯉のぼりが晴れた青空を泳ぐ風景を目にし、テレビなどでもその風景がよく映されています。だがこれは旧暦にはなかった風景です。新暦の 5 月 5 日は「立夏」にあたります。別称菜種梅雨ともよばれ、毎日のように雨が降りつづいた「穀雨」期がやっと終わって、さわやかな夏が到来する頃です。その変わり目が「立夏」です。太陽がサンサンと射しています。乾いた空気、カラカラ天気空に鯉を泳がすような残酷なことを、旧暦の人は考えなかったと思います。

反対に五月雨とは梅雨の雨のことです。「五月雨」とは芭蕉が「五月雨を集めて早し最上川」と吟じたように、毎日々々いつ果てるともなく降りつづいて、地上には大変な雨量がたまります。ただでさえ流れの激しい暴れ川の上上川が、山間の細流や支流から梅雨の雨を集めて激流になって本流に流し込んでゆきます。轟音だけでなく地響きを立てて、圧倒的な水量が最上川を溢れんばかりに流れている、その光景を芭蕉はうたったのでしょうか。だがその梅雨と梅雨の合間に抜けるような青空が広がる日があります。それが五月晴です。そんな日、地上の水分は蒸気になって立ちのぼってゆく、ムンムンして不快指数が急上昇します。農村ではいくぶん不快指数は緩和されていて、田んぼに水が張られ、田植えがはじまっていますが、湿度の高いことに変わりないでしょう。一面海か湖の感があります。つまり地上がすべて水の世界に化している中で、空に紙製や布製の鯉を泳がせて、自分たちは水底にいて、そこから上方の鯉を眺めるといった粋な趣向を凝らしてみる、涼しさも感じられるのではないのでしょうか。中国に「登竜という激流を鯉がのぼった」という故事がありますが、ここでも鯉と激流は欠かせない装置です。菖蒲もまた梅雨の雨の中、切っ先鋭く茎を上へのぼして、その先に天に向かって花をつける姿に、尚武を読み、男の子の節句にしたのだと思います。そのような光景のもとで、五月五日の端午の節句を思い浮かべてみましょう。

c) **七月七日**も五節句の一つで、夏の夜空に南から北へと伸びてゆく天の川銀河にまつわる織女牽牛の恋の伝説で有名です。ただ最近では街が明るくなり、天の川を見る機会も少なくなっています。それに新暦の 7 月 7 日の頃だと、まだ梅雨が明けておらず、夜の星空が見える確率はひじょうに少ないのが現実です。旧暦七月七日は、今年の新暦 8 月 13 日。この頃ですと、晴天がつづき、星空も広がっているでしょう。それから新暦 7 月 7 日では月相はわかりません。旧暦の七日ですと、上弦の月でほぼ真南に昇り、午後 10 時頃には西に沈みます。天の川は月より弱い光ですので、月が出ている間は隠れています。その間北東にある一等星織女星(こと座の一等星ヴェガ)

と牽牛星 (わし座の一等星アルタイル) は川に邪魔されずに会うことができます。月が沈むと、天の川が姿を現し、二つの星は川により引き裂かれてゆきます。

天の川伝説は、この夜空の変化を物語りにして作られたものです。織女星は天帝の娘、毎日休む暇なく神々の着物を織っているので、天帝は愛おしく思い、真面目に牛飼いをしている牽牛星と連れ添わせませす。二人は喜び、いつも一緒にいて仕事をしなくなったので、天帝は怒って二人の仲を引き裂きます。だが今度は二人は泣いてばかりいて、これも仕事になりません。それゆえ天帝は二人に、きちんと仕事をしていれば、1年に一度会うことをゆるそうと言います。月の出ている間は天の川が消えて、二人は会うことができますが、月が沈むと天の川が現れ、二人は別れてゆかねばなりません。そのようなラヴストーリーです。国立天文台が行っている、七夕の夜空をたのしもうというキャンペーンはなかなかオツな企画だと思いました。

五節句の他の節句、三月三日 (上巳の節句)、九月九日 (重陽の節句) についての説明は時間の都合で割愛いたします。他の機会にゆずりましょう。

その他に、季節の移り変わりを生活の中にひきこむために、雑節とよばれるものがありました。これも日本で作られました。節分、彼岸とか土用、立春を基準とする八十八夜、二百十日、二百二十日、入梅などはそれにあたります。これらのことについての講釈もここでは省略します。

なおここで暦の導入に特に熱心であった持統天皇の歌に触れさせてください。当時の為政者が暦にどのような思いを託していたかを感じとってください。二十四候の立春につながります。歌は有名な「春過而 夏来良之 白妙能 衣乾有 天之香来山」(持統天皇) (万葉集1-28)。「春過ぎて夏来るらし白妙の衣乾したり天(アメ)の香具山」と読みます。私は、ずうっと、なんてつまらない歌、春が過ぎて夏がくるという事実をただ詠んでいるだけの、音数律だけを合わせた散文的な歌だと思っていました。しかし暦に関心をもちはじめて、この歌への評価が変わりました。持統天皇はたんに字面だけの表面的な意味とはまったく別の感慨をもって作歌したように思うようになりました。持統天皇は夫天武天皇との思いで深い飛鳥浄御原京を廃して藤原京を建設しました。日本史上最初の、条坊制を敷いた本格的な都城で、律令国家への大きな一歩を踏み出しました。同時に儀鳳暦を採用することによって国家経営の基盤となる租税体制を整備しました。だがそこに至るまでに、持統天皇の長い苦難の道がありました。みずからは天智天皇を父とし、蘇我倉山田石川麻呂の娘遠智娘を母として生れますが、天智の謀略で祖父は殺されます。その悲しみと恨みを胸奥に蔵いこみ、天智によって政略の道具として嫁がされた天智の弟大海人皇子とともに政治の第一線に立ちました。夫とともに九州に出陣し (白村江の戦い)、散々な敗北を喫します。やがて壬申の乱で夫とともに戦い、天智軍をたおしました。夫は天武天皇になりますが、道半ばで死亡、その夫の遺志をついで律令国家建設の大事業につきすすみました。その過程で誉れ高い大津皇子や高市皇子等、天智、天武の血を引く多くの優秀な皇子たちを次々に他界させ、みずからの実子草壁皇子を即位させようとしたが、草壁が急逝。最後に孫を文武天皇につけることで、凄惨な権力闘争に決着をつけました。おそらくそれを国家整備のためにどうしてもくぐらなければならなかった道と持統は考えたのでしょうか。そのような春、春といっても晩春の穀雨の季節がやっと終わりにになりました。「天(あめ)の」は「雨」を懸けているのでしょうか、霽がかかっていた香久山は、今日その全貌をはっきり見せています。夏が来たのでしょうか。これは立夏の歌だと思いました。香久山の麓を「白妙の衣」、白い薄絹がなびいているのでしょうか。なだらかな香久山を自身の横臥する身体に見たてたエロティシズムさえ感じさせます (私の読み過ぎと言われるかもしれませんが)。また天香久山にはみずからの母方の祖蘇我家のかつての栄光がしのばれます。蘇我蝦

夷がまだ政治の中枢にいて天皇人事を差配していた時代、舒明天皇は次のような長歌をうたっています。「大和には群山あれどとりよるふ天香久山登り立ち国見をすれば国原は煙り立ち立つ海原は鷗立ち立つうまし国ぞ蜻蛉島 (アキツシマ) 大和の国は」(万葉集 1-2)。舒明天皇は、標高 152 メートル強の香久山に登り、国の四方を見渡して、民の豊かな生活をうたっています。善政の証しを確認する高座だったのでしょうか。そのような蘇我一族の血を思い起こしつつも、その末練を振り切って新しい国づくりに向かう決意が持統の歌に秘められていたのではないのでしょうか。

7. 月の相を読み込むと、歴史は面白くなります。

旧暦が遠くなった私たちの世代では、月の現れ方にあまりなじみがなくなりました。旧暦が静かなブームになっているのは、現代文明が犠牲にしてきた月に親しむ心のノスタルジーが働いているからだ、と思います。旧暦では何月何日と言えば、月のかたちがわかりました。時刻まである程度言い当てることができました。一日 (朔日) は新月で、真っ暗です。七夕の七日と言えば上弦の月で、昼頃東からのぼり日の暮れる頃南の空に現れ、夜の十時頃西に沈みます。そこに牽牛織女について先に言及したラヴストーリーが生まれる拠り所がありました。十五日は満月、日の入りの頃東から登り、真夜中南の空に見え、日の出の頃に西に沈みます。そうした月の相の微妙なずれの中に歴史の栄光と悲哀が見えてきます。2 例だけあげてみます。

a) 江戸中期の俳人と謝蕪村は菜の花をよく季題に発句しました (9 首が知られています。) が、なかでも「菜の花や月は東に日は西に」という一句が特に有名です。この句では、一面に広がる黄色の菜の花畑がうたわれています。この句の月はいかなるかたちをしているのでしょうか。

大学の授業でこの句をとりあげるとき、学生にその月相を聞くことにしていますが、きちんと答えが返ってきません。東にのぼる月は概念でしか理解されていないということでしょうか。実際に東にのぼる月のかたちは満月です。理論的には黄径 (地球が太陽の周りを周回する軌道の経度) 0° である春分 (因みに夏至は 90° 、秋分は 180° 、冬至は 270° です。) の日没の頃、月は真東にのぼります。あたりは煌々と照らされています。当時の人々の眼には、電気の明るさに慣らされてしまった現代の私たちには信じられないぐらい、満月の光は明るかったでしょう。書物が読めたと言われます。蕪村はその明るさの下で黄色い菜の花が少し青みを帯びて見渡す限り広がっているのを眺めていたのでしょうか。西のほうには太陽が白く色を落として沈んでゆく、というのです。ちょうど蕪村の生きた時代、大阪北部の北摂の一带では菜種油の需要が高まり、菜の花畑が米作の裏作として耕作されるようになっていました。新しい富裕層の登場があり、菜の花はその象徴でありました。そこに満月の煌々たる光があたり、自分を、沈んでゆく太陽に象徴される古い農民層に見立てながら、しかも新興層をパトロンにして生きてゆかざるをえないアイロニーを、この句に読み込んだと言われています。その満月もやがて夜明けとともに西に沈んでゆくことになると読むことは、読みすぎでしょうか。

b) 元禄十五年十二月十四日。二十四候では大寒。前日は雪が降り、その夜はよく晴れて満月、あたりは雪を踏む草履や下駄の歯のあとがそれとわかるほどに、明るく照らされていました。すべて凍てりつく夜だったでしょう。暁七つ (午前 4 時ごろ)、大石内蔵助ら四十七士は吉良屋敷に討ち入ります。当時は明け六つ (その頃冬至に近く、午前 6 時半頃) で日が変わりますから、なお十四日。前年三月十四日浅野内匠頭が殿中廊下で吉良上野介に刃傷を負わせ、そのかどで即日切腹を申し渡されて果てました。だから十四日は月命日にあたり、討ち入りはその日にぎりぎり間

に合ったということになります。吉良の居場所はなかなか突き止められませんでした。月没は七半(朝 5 時 17 分頃)、月が沈むと真っ暗になります。闇の中で吉良は救われたと一瞬安堵したことでしょう。だが四十七士は灯を用意していました。闇の中でも吉良を捜すことができたのでしょうか。吉良屋敷の隣に旗本土屋達直の屋敷がありました。土屋は夜闇の中で吉良の首が討たれたことを知ります。かれは壁際に灯りをともして「塀を越えて入って来る者はすべて切り捨てよ」と触れて回ったと伝えられています。月没の七半(朝 5 時 17 分頃)から日の出の明け六つ(6 時半)までのほぼ 1 時間間にことは成就したのであります。四十七士討ち入りの話は、皆さん十分ご存じです。だが月没と日の出のドラマまるで映画のセットのようではありませんか。

8. しめくくり

旧暦を基にする伝説、伝承、神話、文化についての言説は、絶えることがないでしょう。日本という、極東に円弧状に張り出している列島に人が住み、晩くとも農耕が人びとの生業になりはじめた頃から、暦の意識ははじまっています。やがて国家整備に不可欠なものとして中国の暦が導入され、人びとの生活や文化も暦にあわせて営まれるようになりました。暦制度は人間の生存の条件にさえなっただけでなく、とくに東アジアではそうだと思います。

私は学生時代、美学をアカデミックな世界で学ぶことを志した時から、20 世紀の代表的哲学運動たる「現象学」を研究してきました。現象学のいちばん重要なテーマの一つに時間論があります。だが時間論というと、私の学生時代、1960 年代はそうでしたが、キルケゴール、ハイデガー、サルトル等の実存主義的時間論が主流でした。それは近代科学の時間論に対抗する、死を決意して投企する時間論でした。すべてが無化される瞬間を法悦の時、至高の時とする時間論でした。

それから大学で何十年も美学の講義を行い、多くの芸術作品を取り上げる中で、時間論のイメージが少しずつ変わってゆきました。もう一つの時間、「豊かな時間」とよんでいいような時間があるのではないかと思うようになりました。内容がいっぱい詰まり、私の生きている今が永遠につづいてほしいと願うような時間があるのではないか、そう思うようになりました。自然と共生する意識の時間はそういう時間でした。その具体的な場面として、私は暦に出会いました。暦は制度であり、国家統治や政治や経済や長い惰性的な習慣など、非美的な要素がいっぱいとわりついていました。だがむしろそうだからこそ生き生きとした時間意識が内包されているのではないかと、思うようになりました。

中国の暦は天体暦です。天体の研究は近年宇宙科学として長足の進歩を遂げています。また気象科学も、人工衛星から送られてくる豊富なデータを駆使して成長し、「当たらない天気予報」から「よく当たる天気予報」と言われるまでになりました。それらについての基礎的知識を学びながら、私はこれからも暦を文化、美学の方面へ広げる努力をつづけてゆきたいと考えています。その過程で、東アジアの民との文化の共有、月への親和性をさらに強めることに貢献できれば、と願っています。

地球は狭くなりました。国際化の時代に生きてゆくために、バイリンガルの教育の必要が叫ばれています。その言い方を借りれば、バイカレンダーも必要ではないでしょうか。世界を駆け巡る政治、経済、交通、大学、科学、芸術等、さまざまな分野の情報をさばくために、グレゴリオ暦はもはや欠かせぬ暦です。だが長く築いてきた生活や文化、大地とのかかわりの中で生まれてきた cultura (原意：耕すこと；文化、修養、教養 → agriculture 農業) の基盤としての、日本あ

るいは東アジア・モンスーン気候帯の太陰太陽暦 (旧暦) も歴史と文化、それになによりも豊かな生活を維持するために必要な暦であると思います。バイカレンダー (両つの暦) を提唱します。

(本稿は、TSS 文化大学における講演内容を纏め、広大マスターズ HP に寄稿されたものです。)